



卷之一

物是矣

我	常	如	梅	京
黑	牧	泉	盛	城
晚	方	言	似	
山	山	水	船	

5
1814
2



へ5
1814
2

特

今所註之二十有六卷每句雖可施註不遑
悉記唯其點有大過不及之不同因到
其處各註之故未有一句無註才看
一二卷不能通全當濫觴以至無底
者也評中有甚誤者粗拾收列一次
如左

○發句爲長點

○脇句不用正花

○第三根字不爲難

○第四不知無誹言



○草、舞臺之句、見有種々異

○馬廻之句不知打越惡○家櫻之句不知無誹言

○生、轡之句不知輪廻○競狩之句以為馬或暴

○山伏之句犯同字○眺望之句不改重煩

此外、氏余於葉之差句、意吟弄之善、惡

不可勝計、此所以不可容易看過也

此係削り上奥事、越
と控りて、そのまゝ受流
為る流々名作、而世能
得く、空不台阿、何句、
と、そのまゝ新お造り
く、候む、好、係、昔、
今、と、正、き、い、
又、那、の、り、の、
及、形、の、
色、人、見、
第、三、
と、
い、
言、
老、人、
此、
追、
鼎、
と、
段、

三日月、此、あり、と、
とかい作ううさ
紙、

死、の、り、り、り、
葉、

杖、の、切、并、の、う、み、
表、

任、右、と、か、し、ら、
人、

此、い、の、あ、え、
福、

あ、か、ん、
舞、臺、の、
衣、

何、文、
一、
糸、

一
聾れ登寢よ枕まわらせ
婦のうら鏡をちりたき風き
潮をほきこみ又むすよ
秋来とも為陳所つこ町造
後宮もたよ月おはや
親の目ふあまらり知るに今
すよこさく馬海りりか

一
きよのあけつきゆくふあれた
羽留れ旅籠の味淡きなり
ひ眠いほりわと寝んか
祈託くし着るもの場
まぬれ是よ浦の釣とれく
私と者よらんをぬる部
ひよのけえおれ指し春過

社よりあふ法糸の奇
素ら歌を女らわやく練れ内
或程あつて素 淨定
はくくく又を響よまらるる
人中こそと能乃にほされ
懐ひ程思ののこ猪さといひ
氣と素らくく素よ松の下店

山伏のた月あつううくさる月
おりふ矢はわぬ麻射さるら
露あよ極ううく御下あう
是くある衣よ望河くく
死のあた念佛意よ打こり
つ建うれぬいさうく和の御
是深くうらる眺をふ硯あ

引くこと行へじ蝶の翩翩

十九点

梅盛判

心詠吟をききたり一披見はたふとも
さしあらしもそなく心作意はたふとも
らぬし心種をたふさうりうてはたふとも
白くも心種をたふさうりうてはたふとも
氣さうりうてはたふさうりうてはたふとも
さうりうてはたふさうりうてはたふとも

教句無点

脇書うして教句をよ
しと雖非たは難き
句の点とて又ちか
く教法也是巻の頭
なる故也そは法を
人の又いふは

第三房四 平点

ふむのいとつら白平珍也
い表のいと長よりの
い脇ありと自註も
あやするも同定當句
あふふんはそれなり
色つらいと

草の舞三卷

脇書よ神更結とよ
白意をすし書入
せしうは八ふより

三日月のわりとて糸の紙馬

糸の紙馬

杖の切糸のうらみ

風船とつじり人

心種の糸

草の舞三卷の糸

糸の舞三卷の糸

てきゑ有へし主非
更替い表りの不苦や作
者此自種さよいあす
そく候の心也物ま真
行草ありそ草あり
又詠草草葉と云
るし一見 秘 同と

後書せし 子珍あり
打ちの脇書とるり
よ月歌の書とるり
と打ちとるり書
みすき愛句の月々
しうとるり書
入の漢とるり

きみまゝ
ひ白打り一のむら
り長魚とるり書
おし白書とるり

家さうり 無点ちや
脇書あり白り白
紙に白れ巻りて可
録

若草の句
脇書とるり傘
のりけし巻きいとの
うとるり書
もや京とるり書
るいあれと田舎るり書
のりあうり書

何文一宗式ふばら志られ

草の意寝し枕まのり珠

婦のるる後けあひ立ぬ紀

踊らのまゝ又しすふとる

秋もあしあ陳行つと町造

穢書もとるり月のるり包けと

親の目ふらりらとるり今共

孔のるり馬海りり新

乱のるりあれつとるりゆくとるり

お智の能能から味清とるり

い眠いけりれん乱様

何作くそ若草の場

たさあり傘の歌し
何とるり書

かきしとるり書

月歌の書とるり書

とるり書

竹貫家を
あかりとるり書

りらとるり書

血氣勇とるり書

れりしとるり書

郵とるり書

けしきうん 各点を辨
也い句は誰ニもわり
いさの方とを定めて
らせり書入ちりまこと
せそむ

鏡並 各点脇書也也
た然をて色わつゆ
き書入あつてあそ
多しは又足またり
鏡並のうみおはせり
六伏の句 各点中
あ句下下奄しわりむ
百人し下下まよそり
月と竹とさくら院句
あましく満月新月降
月と書ゆくや何ん
當句の下文のみよま
心〇〇六伏のそりい
きくせくおたり月
とおひつりあはれ川
墨あわやまらうそり

まぬはるる浦を納とれく

帆す若ふ人ともぬ 茶の外

いふけいふおれ持も音あし

社りるる法系から哥

帆ら朝の女うあやー練水内

急務と〜菜 仔細定

はかへん又も響に生るる倉き

人申〜い船かんれ何とせ

情心程思の〜結さうり

氣と煮〜旁よ松の下層

六伏の右力〜〜〜〜〜月

ねもふ夫つふれ麻射〜り〜ら

鏡並 五月昔の音あつていよPのあや
又後らうと〜〜〜〜〜〜〜

わ〜〜〜〜

急務と〜菜 仔細定

霧あふ枝ぐさく清あふ

風くまの衣よ澄あふ

衣の捨てたまの似る

死の念念念佛喜うらこり

とてよりの澄の内院の事

風くまの衣よ澄あふ

死の念念念佛喜うらこり

風くまの衣よ澄あふ

死の念念念佛喜うらこり
作者の自注と云
一平と云

死の念 平珍也
柳の葉あり枝に
さしけり人か
あつた奥と云
云

毛鐘印

二十九句 長四末

芦月庵

似船判

元禄三年五月十日

形勢の強弱 吾意を以て
 してはむと云ふこと一白
 いかんかのの物としよ
 きふの如何 但し打ち
 け馬廻りと強弱しや
 つまらぬや作者の
 自註の武士責みの
 みとはくれしこと
 む強弱のいふこと
 も是より同と

亂れしあはれつとゆくはあらし
 如智の強弱の味法をわたり
 此眠はけりつとまじり流極
 所活くまじり卓れ場
 去ぬれ早りし浦の新とまじり
 船と若ふととぬる外
 乱れつとまじり極と香極

無点
 脇書きの何れも
 ありありと
 の夕調和其角点の
 巻よあらしと

乱れしあはれつとゆくはあらし
 如智の強弱の味法をわたり
 此眠はけりつとまじり流極
 所活くまじり卓れ場
 去ぬれ早りし浦の新とまじり
 船と若ふととぬる外
 乱れつとまじり極と香極
 乱れしあはれつとゆくはあらし
 如智の強弱の味法をわたり
 此眠はけりつとまじり流極
 所活くまじり卓れ場
 去ぬれ早りし浦の新とまじり
 船と若ふととぬる外
 乱れつとまじり極と香極

くろく月
 百首尾へくしあを
 前句の下文字もま
 り苦やと作あゆや

まゆくあゆ衣
 死のそわり白
 長点作者の自註
 色よくうーいんしん

山伏のそわりのくろく月
百首尾へくし

れりふまはかしの麻射るる

乱舞よねうさく清木ゆき

引くまの衣よ置河くも続

死のそわれ念佛よさうらこま

つぎそくまぬらたてしねも肺

死のそわらる眺望ふんあ

くまひさーき蝶まふ翻翻

引墨正
内長拾
 内弥重六

歌藤如泉判

午端午

長点の腹書也

句頭月の新とい如何
恨むをいづる首尾
ふつきは終る毎分
事いへて点云々

脇 腹書卷の点也

作者も秀逸よおま
いせきより短まよ
ろく予を同く

第三 長点如何

発句よながふ氣味
あり新は恨のこし
おろしうききり

第五 脇書也

踊らうまの脇書

おろしの新まは
さうりういわ
い定の連よむら物史
交し能保何しをい
予白の揚しきり字
よかきくまの物倍
れすのわら類い

式日月わあうとい新紙紙鳥

式 花のたもらわらも草の花

式 切并のうらみいさみ

式 住居とほひら人のとま

式 しのりろし酒をうら

式 糸の舞巻れ衣おれりら

式 糸のうらまとうらま

式 舞のうらまは花田り

式 舞のうらまは花田り

式 舞のうらまは花田り

式 舞のうらまは花田り

式 舞のうらまは花田り

月のうらまは

親の目もつれぬの脇書

月の名やけさのまをさ
ことし何れも是何し
よや石 露をやけさ
小田と何れもさ

音のまを点知也

脇書の近奥のまを
みる

流さくろく 音点也

脇書所くはのし連
誹のまをさくろく
おとつさくろくは
未修く

親の目もあまるり却る後今也

月の名やけさのまを
ことし何れも是何し

可みさくろく馬まのり

大井 恒

高文のあつさくろく

大井 恒

お智の臨龍の味清さ

此眠いけろくともろん家様

所 作くまを若草の瑞

此書

親の目もあまるり却る後今也

可みさくろく馬まのり

高文のあつさくろく

お智の臨龍の味清さ

此眠いけろくともろん家様

所 作くまを若草の瑞

親母のまをさ

親の目もあまるり却る後今也

脇書所くはのし連
誹のまをさくろく
おとつさくろくは
未修く

はろうろくの句群

はろうろく又と響く

競遊 加字を也

人中へせいの船の杉舟

情に程足りの勝

系と煮く煮よ松林下居

山伏の右刀

ねまふ夫つべれ鹿射

くまの月

前句は同字をさう
よて川をくもる
係 志力いさくく
月夜とありくまの月
くまの月

流るるはね

是れは

死はあつ念佛

つまき

死は

くまの月

まろくまの月

唐衣巻の志作者の
自註を予見す

死の句 極上意如何

山向船海
黒方吟の詩は終り
船とまきくまの月
同じ

三十之書

長十四

内珍十二

秀五

言水判

本心

不後

發句

無忌脇辛

分かつハ中ノ事
同書ニ紙馬坊
至ニ一ノハニ
四ノ紙馬坊
昔年ノ三日ノ月日
ニ中ノ尺ニ紙馬坊

守三
服手ある由

身五 長息此難およ
と服手作者の自
種よたあ

三日月のわらわの料地紙馬

丸のりりれりも書家の巻

杖と切平のうらみ春あせ

倒若をほむら人のとらら

ふいらあし移し酒危たうと取

引の舞危れ衣物あうらた

追憶よ 五世んや

後書知とよ 吾馬言
併也如何打あし 踊
大娘いあうん
赤糸

い誰介の巻よあ

馬中入也 服す小字
川のえ際とありい
ううとととあまかき
といつとあまももや
き水庭をかなう
打付とすしるん
たろと

お智の白 吾馬の歌

象橋乃白 吾馬歌
茶後の巻よとあり
あ

河文〜あふさふさうらとんれ

舞子の屋敷よ花りつとあ

姉さんんる後けありとまのそん

増んつと

踊らつと又じすあや

秋まくとあ陳あらし町造

後書知とよ月のあや

親の目ふあまらうらとん今亦

すふとと馬まらうら

お智のあつとあまらうら

茶後の巻よとあり

お智の旅籠味淡とあ

水殿つらわとあ人あ橋

新 証く〜あ草の場

10 春のぬれ目くろの浦新しき

10 新くとも者よんよわき

10 新くともはいふおのれ

10 新くともはるはるの

10 新くともはるはるの

10 新くともはるはるの

つらうらむ 慶長
大馬也い新市の巻
はま

10 新くともはるはるの

10 新くともはるはるの

10 新くともはるはるの

10 新くともはるはるの

10 新くともはるはるの

10 新くともはるはるの

競駈
くまの月
右三つとをを忘
作也脇手河の由

一 霧のふもゆるく 舟の所始り

此所の表より射る

一 舟の表より射る 霧の所始り

死のあつり 舟の表より射る

作者の自筆より

一 死のあつり念佛 舟の所始り

一 舟の表より射る

一 舟の表より射る 舟の所始り

死のあつり 舟の表より射る

作者の自筆より

一 死のあつり念佛 舟の所始り

一 舟の表より射る

一 舟の表より射る 舟の所始り

活字二十七点

朱長二

星長二

長五

輪六

沈内

常牧判

發句第三代類聚

あ

脇 作者自註と云

手し回す

三日月れ何くも新紙を巻
けしこゝろ

刻もりりりりもまきの屯
心無文し

杖の切并のうすきまのて
此重

風船とほびら人のとら
うす
振り

川らきけしほ屋なり
此重

梨如舞舞屋の衣おぬり
りたり

酒あゝあふ今日とら
り

翠の屋之後は枕返り
後
画信

娘のらり後けり
り

踊らつきあふ又じま
あ
と文字のあ
あ句

秋来あふあ陳あつ
と町造

猿堂もあふ月のは
り

踊らつきく 第一のこ

文字し高句のこと
文字し矮句のこと
文字し矮句のこと
何れは如何かし

猿堂の句 吾息を
息を
さうりりりりり
りりりりりりり
りりりりりりり
りりりりりりり
りりりりりりり

とくみさく 平兵衛
象さく
いねおれまるといふ
な

若草 長兵衛如何
おろしうらとをうら
と能く味いして息
をうら作者は自筆
分明はわらうと法方の
息くは長兵衛

新借の句 平兵衛
脇書れ歌言水鳥の
巻よあ
惣く平兵衛長兵衛の
し頭へ平あうらり
不変くうら所は
うらて取めうら別て
平兵衛息門くこの奥
わらうは脇書れ歌
て平うらけ又い層衣巻
とま書へく平兵衛の
とうらりし能く味
ひてい道のうらうら
詠ゆてせうら

系種 長兵衛
作者は自筆は雨

親の目よあまらりあうら今廿
わがあまらりあうら

いふさうら馬まうらり
長重

あまらりあうらあうら

お智れ能く能く味流さうら
詞うらし風流

あまらりあうらあうら
うらうらうら

あまらりあうらあうら
うらうらうら

あまらりあうらあうら
長重

あまらりあうらあうら
文字えうらうら

あまらりあうらあうら
平兵衛と平兵衛

あまらりあうらあうら

あまらりあうらあうら
長重

あまらりあうらあうら
あまらりあうら

はつらつと
脇書ゆえうへ一首
尾よおわくまきの
まいかくきく
まおらうのふ若別
まけり

競駈の事

お巻三巻一

くく月 三巻
脇書をたり

御所ぬき
服すよ白意とあき
あきくまきあひ味
い面白く作者の
自注をすも同

花はくくろく眺を
脇書面白く
方山西吟のふく同

つらつと又も書にまらるる
愚意のふくまき
首尾の事

西じ程思のく勝ささしり

あくと書りく常くしねの下巻

山伏めちりつらうくくく月

たもふまつかれ齋討さりつた

くく月、降行月、くく月
お白の下は行句とくく月

病あぬよ極く御所あう

あきくまきあひ味
常陸の食の何あやし
あきくまきあひ味

死のあひ念佛 意くくく

つらつと又も書にまらるる

花はくくろく眺を
眺しをくくくくくく
あまのくくくく

くくくくくく せぼね 翻 翻

愚問答滿三十之内

長十四
弥五

舟叟子

我黒判

車心

こ

教句 無修少く平也

とらきうう 新い句ま

をまきまううひま

もや一巻の頭なれを

ふくと 脇よのふり

脇弟之 善惡の暇す

弟これ巻よあ

佐治と 脇善は淋言

ひ批言ありかあり

くふふあはあ連致

の巻り

ふ位とわしらむようや

とつらうわらとこれ

いひくし淋言いん

はと又佐治とあひ

い連しあてあつし

三日月の何とこい柳を紙せ

毛の毛りたれも葉の死

杖と切并のうらうら

佐治とわしら人のと

ふいふのち福し酒を

あかしの葉巻のち

三十一

浴後一 脇書るの
糸よ打たれし色しむ
しく書改めらる
程もそそむ

婦のふらり
服すの言水より

浴後一 糸のふらり
と白の糸よ打たれし色しむ

婦のふらり 髪に
髪に 髪に

婦のふらり 髪に
髪に 髪に

婦のふらり 髪に
髪に 髪に

婦のふらり 髪に
髪に 髪に

婦のふらり 髪に
髪に 髪に

親の月とあまらう志し今共

丁みくさくい鳥まうり物

乱れあつてゆくわらわ

お智の白
脇書るうしくさ
うせしきさより

け眠るうらとまらん家梅

竹花くちあ草水湯

糸さくら
脇す排うらとま
うらとま
一時軒点の巻ふあ

此の如く是より小満の節はさき
 和と者ふらとぬるの補
 いのほ都の橋も音あつ
 社よりまらるはよれ等
 此の如く是より小満の節はさき
 和と者ふらとぬるの補
 いのほ都の橋も音あつ
 社よりまらるはよれ等
 此の如く是より小満の節はさき
 和と者ふらとぬるの補
 いのほ都の橋も音あつ
 社よりまらるはよれ等

けしうり又も響よまらるさ
 人札は心は心か
 心は心か

此の如く是より小満の節はさき
 和と者ふらとぬるの補
 いのほ都の橋も音あつ
 社よりまらるはよれ等

此の如く是より小満の節はさき
 和と者ふらとぬるの補
 いのほ都の橋も音あつ
 社よりまらるはよれ等

競馬
 暇書知也れ奥と
 名所なり

今月 平島お何
 名所の同字ある
 一々の如船馬の巻よ
 考しつゝいふ
 脇まよふふたののり
 をまらるり余人い
 流せしつゝは流せし
 今月 平島お何

死のあはれ念佛をうらまへり

死のあはれ念佛をうらまへり

死のあはれ念佛をうらまへり

死のあはれ念佛をうらまへり

死のあはれ念佛をうらまへり

死のあはれ念佛をうらまへり

つぎつぎとまゐる
麻衣の息をうらまへり
作者の自註し
るも同く

死のあはれ念佛をうらまへり
脇書の公我墨西吟と
いふ

戲墨三十

内

- 長 五
- 朱九 一
- 陰九 一
- 珍重十一

招鳩軒
方心判

發句 脇書作者の
自注は白一係るふ
そつふくく類は深

第三 意味よく脇
書也

草の舞卷
脇書は春日の里れ結
とけとあふくわれお
まうせくく藪の結と
空はふあもかよて
表はうらうらうらと
似船の書入しりる
罪は

踊らうまそく
脇書自注は

二月月れあうらうら科と紙

陽をうらうらとて
のらむあうらうら

花のうらうらうらも葉はむ

杖は切并のうらうらみはあうらう

百の心作意
とかがけうらの氣味

風は吹かする人のうらうら

ふらうらうらうらうらうらうら

けうらの杖をうらうら
くれきうらのあうらうら

草の舞卷のなぬらうらうら

春日の里れ結とけし

かまうらうらうら今日うらうら

舞のうらうら夜に杖田うらうら

柳のうらうら後あうらうらうら

踊らうらうら又しうらうら

懐疑のき
髪のをけりあうらうら

秋あうらうら西陳あうらうら町造

後あうらうらうら月あうらうら

すみろく
まほや脇書あり
留

親の目ふあまるまきくに今女

すみろくまほやより物

親の目ふあまるまきくに今女

親の目ふあまるまきくに今女

流儀 平珍也 珍
白頭 平珍也の巻よ
あ

此眼より
流儀 平珍也 珍
白頭 平珍也の巻よ
あ

親の目ふあまるまきくに今女

親の目ふあまるまきくに今女

親の目ふあまるまきくに今女

親の目ふあまるまきくに今女

親の目ふあまるまきくに今女

親の目ふあまるまきくに今女

社不文所 長点
作者の自伝も定
められてとわり
本意の仕合を
点あり

染點二十九

内 長八
弥五

瓜木

晚山判



松堂軒菜



